



## Our Concept ～展示によせて～

UTaTané 代表 加藤 多笑

### 1.はじめに

いよいよ駒場祭が始まる。UTaTanéは、来場してくださる参加者の一人ひとりと会い、語り、聞き、ともに問いを探ることを楽しみに、準備を重ねてきた。みなさまには、ぜひ、個性あふれるメンバーがつくってきた展示を体験していただきたい。（また、ネタバレを含みかねず、また遊んだことを前提として各展示の詳細の説明は割愛するため、本稿は展示で遊んでから読むことをお勧めする。）



さて、今、この文章を書いているのは、前日準備の終わった夜である<sup>1</sup>。本稿では、ようやく掴めてきた今年の団体テーマ<sup>2</sup>「まざりあう世界、変わりうる私～きみとともに、科学とともに～」を振り返り（2章）、私たちの活動の意義や価値を再考してみよう（3章）と思う。仕上がってきた展示を目の前にすると、そこに文章を付け加えるのは野暮な気もするが、次に進むための小さな踏み台となることを目指して、少しばかりの言語化を試みたい。

先に進む前に少しだけ断っておこう。私は代表ではあるが、一人のメンバーにすぎない。UTaTanéのそれぞれのメンバーは、きっと、一人ひとりとても面白い世界を持っている。ここに書いていることにも、別の意見や考えを持っているかもしれない。また、各展示にも少しずつ言及しているが、展示で扱ったことのごく一部にしか触れられていない。本稿は、団体のなかの、一人の考えが書き連ねられたものとして読んでいただければ嬉しい。

<sup>1</sup> いつになく順調快適に準備が進んだとは言え、一日教室で準備をしていた夜である。走り書きも走り書きで、読み返して直すことすらほとんど叶わない。間違いがあれば教えていただきたい。

<sup>2</sup> UTaTanéでは、毎年「今年度のテーマ」を、全員で四、五ヶ月かけて議論している。今年含め過去6年のテーマはウェブサイト (<https://utatane.github.io/#theme>) に掲載している。右上のQRコードから飛べる。

## 2.何がまざりあうのだろうか？変わりうるのだろうか？

今年のテーマの「まざりあう世界、変わりうる私」は、私たちにとって、自分たちで決めたとはいえ、それなりに難しいテーマであったように思う。テーマを決めた後も、随所に議論を重ねてきた。今、改めて、その議論を踏まえて、今回の展示たちを振り返ると、やはり今年のテーマを考えるに不可欠な展示であるように思えてくる。展示たちの一つ一つをごく簡単に紹介しつつ、**何のまざりあいを考えようとしているのか、まざりあいの中で何が変わりうることを見ようとしているのか**を、ひとまず3つに分けて整理してみる<sup>3</sup>。

一つ目として、「私とまわりのもの」があげられる。ものには、物理的なモノや情報、近く的环境や、過去の経験（を形作ってきた周りの世界）などが含まれる。「私の見方をつくるもの」<sup>4</sup>で遊ぶと、何かを見た時の**自分の考えや印象だと思っていたことは、本当にそうなのか？**という疑問を持つかもしれない。絵画だけではなく、SNSでの発信を見たり、本を読んだりする時にもまた、自分が対象だと思っているモノ以外の影響も受けているのかもしれないと思えてくる。この視点は、「「かもしれない」と付き合う」にも通じているだろう。同じようなリスクを人がそれぞれに捉えているのは、そう簡単にはっきり指し示すことのできないような要素が複雑に関わり合っているのかもしれない。

また、「どきどき商品開発」は、やや視点を変えて、食品などを題材に、購入してもらうための情報を作っていく体験である。何かを見たり、受け取ったりする側から、買ってもらう側に回ると、買うという行為に結びついている様々な「まわり」に目が向くかもしれない。決めては美味しさだけのように思っているも、本当はさまざまな要素の絡み合いの末の購入なのかもしれないという気がしてくる。

さらに、「私のまち、あなたのまち」では、人と一緒に遊ぶうちに、他の人との違いを感じるとともに、自分の感じ方や考え方を形作ってきた経験やものも思い浮かんでくるだろう。

二つ目として、「私とあなたのまざりあい」があげられる。UTaTanéでは、長年、「コミュニケーションの問題」を直接的に扱ってきた。今年度、**私たちが扱おうとした「コミュニケーション」**は、たしかに私とあなたのまざりあいに関連しているように思われる。

---

<sup>3</sup> 一つ一つ明確に分けることができるようなものではなく、重なっているかもしれない。

<sup>4</sup> 以下、個々の展示について言及するときは、下線を引く。2章のなかに10展示登場しているはずだ。

ここで少しコミュニケーションにおける相互作用について考えてみたい。伊藤亜紗<sup>5</sup>は、コミュニケーションのモードとして、2種類を区別している。一つは伝達モードで、もう一つは生成モードである。前者は、たとえばAさんとBさんがいて、それぞれ情報 $\alpha$ と情報 $\beta$ を持っていたとして、互いに情報を交換（あるいは一方向的なA→Bへの $\alpha$ の伝達）のようなコミュニケーションのモードである。他方で、後者では、その場において、AもBもともに、予め持っていなかった、想定していなかったような言葉や、言葉になりきらない何かが、その場に誕生するモードである。生成モードの時、そこには必ず互いがいることによって生じる相互作用、まざりあいが起きていると言えるだろう。（でなければ、何かは生成し得ない。）

「まざりあい」を取り扱っていると先に述べたのは、生成とまでは言わないにしても、単なる情報伝達としてのコミュニケーションではなく、相互作用を取り扱っているように思われたからである。「思ったことが言えない」は、目の前に相手がいるからこそ生じる現象を取り扱っている。「「ゆずれない」ことを伝える」もまた、相手に反論されるからこそ、そのゆずれなさが浮き彫りになっていく。また、この展示では、ゆずれない上で、それでもなお対話の意味を問いかけているが、そこに意味があるとすればそれは何か生成されうるからなのかもしれない。さらに、「語りに向き合う」では、そうした相互作用の始まりにある「聞く」ことの難しさを突きつける。人の体温のある、時として理路整然とはしてない、語りに向き合うには、機械のような情報伝達とは異なるコミュニケーションを考える必要があるだろう。

最後の三つ目として、一人の人の中での、「公と私」のまざりあいを考えてみたい。ここでは公と私のそれぞれについて明確な定義を与えたもう少し詳細の議論はせずに、大まかに、公を「社会全体のことが考えられた、個人的ではないもの」として非常にざっくりと想定しておく。少し議論を整理するために、政治学者の斎藤（2000）<sup>6</sup>の議論を参照する。斎藤は、昔の「公共の場における議論」においては、公共の場にふさわしいと考えられる内容に限られるべきという規範的要求があったことに対し、現代ではフェミニズム等の主張の流れ<sup>7</sup>の影響を受け、そもそも公私の境界は予め決められるものではなくなったと論じている。まさにその境界も公共の場で議論されるようになることだと考えられるようになってきたのである<sup>8</sup>。

---

<sup>5</sup>障害を通して、人間の身体のあり方を研究している美学者。ここで参照しているのは、伊藤亜紗（2020）『手の倫理』講談社。

<sup>6</sup> 斎藤純一（2020）『公共性』岩波書店。

<sup>7</sup> 第二波フェミニズムは、「個人的なことは政治的なこと」というスローガンを掲げた。

<sup>8</sup> 斎藤はハーバーマスの議論の変化に言及している。

公私の問題は、議題設定にかかわるものだけではない。その述べる意見をどの立場からいかについてこの問題は付きまとう。田中ら（2012）<sup>9</sup>は、近年では、ジャーナリズムの規範においてもまた、個人のジャーナリストが公論と私論の書く場所を使い分けつつ、後者もまた書くようになってきたと論じている。論じられるべきは、必ずしも公論だけではない。後者のなかにある逡巡もまた、言論の空間に載せられるべきものであると考えられている。

そして、この公と私の分け難さは、議題の設定だけでも、ジャーナリストのような一部の人だけでなく、今日 UTaTané の展示にご参加くださっているような一人ひとりが、何かを述べよう、考えようとする時にも関わってくるように思われる。ここで紹介する今回の駒場祭の3展示は、いずれもその一人ひとりの持つ公と私についての規範に関わってくるだろう。

「対話をつくる」は、議論の場にどのような規範をひとりひとりが感じ取り、言えない/言わないということが起きているのかを投げかける。言えない/言わない原因のなかにはこの公私問題も関わるかもしれない。そしてその意見の何が言われるべきなのかを考えたとき、公私の境を問おうとすると、案外不明瞭であるようにも思われる。また、気候変動対策を扱った「私のホンネ」では、重要であると思うがしかしできないという建前（公の場でも言えそうな意見）と、公には語りにくいような本音を扱うところからスタートしている。後者の側も扱うことで、初めて飾りではない対策が可能となるのかもしれない。そのように考えると公私をむしろまぜつつ、考えていく必要があるようにも思われる。

また、上記2展示は、公の規範がどちらかといえばスタート地点にあるように紹介してきたが、「技術を想像する」は、むしろその逆をいく。これは、萌芽的技術への意見を聞かれる時に、自分の利害関心に基づいて答えるように言われていることへの違和感から始まった展示である。一人の人は、その人個人の利害に関心を持つ立場にありつつも、決してそれだけの存在なのではなく、知っている誰か、そして見知らぬ誰かのことも考える一人であるという意識を同時に持っているのではないか、また持つべきなのではないかと考えて、他者を想像していく体験を作った。

ここまで10展示を紹介しつつ、3種類の「まざりあい」を考えてきた。こうして、まざりあいについて考えていると、「○○と○○」との言い方が最初に前提としていた両者を

---

<sup>9</sup> 田中幹人・標葉隆馬・丸山 紀一郎（2012）『災害弱者と情報弱者—3・11 後、何が見過ごされたのか』筑摩選書

分けられる（境界線がある）という認識の前提が崩れてくる。昨年のテーマは、「ぼくの世界、きみの世界」と題し、その違いを強調していた。しかし、今年のテーマを咀嚼してから振り返ると「ぼくときみ」の境はもっと曖昧なように思えてくる。

展示で遊ぶと、もっと別のまざりあいが見えてくるかもしれない。ぜひ、私たちと一緒に探していただきたい。

### 3.科学コミュニケーションから考える UTaTané の現在地

さて、前章では、テーマについて考えてきた。本章では少し視点を変えて、（本当はテーマに関わっていてもいるのだが、）私たちの活動の現在地について手短かに書いてみたい。

UTaTanéの活動を、「科学コミュニケーション」と称することがある。今回は、この言葉を、科学とコミュニケーションに一度分解することで、考えていきたい。（ただし、科学コミュニケーションという言葉には回収しきれない、あるいは回収したくない意義や価値も、UTaTanéは同時に持っていると感じて活動していることは、強く留保しておきたい。）

まず、コミュニケーションについて。先の章で、「コミュニケーションの問題」を取り扱っていると述べてきた。というのも、科学コミュニケーションは、科学の関わる「コミュニケーションの問題」に他ならないからである。ほとんど似た問題系が科学と冠さずともあることは予想される。

ちなみに、私が入会する以前、すなわち 2021 年より前から、UTaTané はコミュニケーションの問題に取り組んできた。例えば、「言葉」や「印象のすれ違い」の問題を扱ってきた<sup>10</sup>。そのなかでも、本年は、「科学コミュニケーション論」として学術的に議論されている内容と、コミュニケーションの展示がかなり直接的に出会える位置まで近づいたように思う。例えば、科学技術社会論<sup>11</sup>の論者の藤垣（2002）は、「痛みをともなうコミュニケーション」（の日本における不足）について論じている<sup>12</sup>が、今回 UTaTané が取り扱った何展示かは痛みを伴うような、コミュニケーションの難しさにも踏み込んでいるよう

---

<sup>10</sup> 詳細はウェブサイトの works ([https://utatane.github.io/works/works\\_list.html#works\\_list](https://utatane.github.io/works/works_list.html#works_list)) から見るができる。

<sup>11</sup> 科学コミュニケーション論をその中に持つ。ただし、科学コミュニケーション論の全てがこの分野に含まれるかはここでは議論しない。

<sup>12</sup> 藤垣裕子・廣野喜幸（2008）『科学コミュニケーション論』東京大学出版会。

に思われる<sup>13</sup>。また、科学等に関わるものを直接題材にしているような展示たちと、コミュニケーションを扱った展示たちの問題意識がかなり直接的に繋がっていることも、展示で遊んでいただいた皆さんには容易にご理解いただけるのではないだろうか。

次に、科学、あるいは学問について。そもそも私たちは、科学や学問の何を扱いたいのかについて、実践を重ねながら議論を続けてきた。これ自体もまた答えがあるような問いではないが、いまのところ私は、展示を通して答えの定まらない、また多くの場合、すっきりした答えをあたえようのない問いについて、粘り強く考えていくことそのものが、扱う科学、学問の姿の一つであるように考えている。

科学や学問は楽な取り組みではない。例えば、私は、科学技術社会論を専攻しつつ<sup>14</sup>、アプローチの一つとして社会学を学んでいるが、初心者ながら、社会学とは、考えなくてもあっけらかんとある程度幸せに生きていけそうなことを、何度も何度も問い返していく学問のように感じる。気持ちの良いところに止まるだけでは、おそらく学問などすることができない。アメリカの有名な社会学者のバーガーは、その古典的な教科書の中で、当然とみなしていることや頑丈だと思っていることを揺るがせてしまうという意味で「社会学という毒薬」とまで言っている<sup>15</sup>。

楽ではないこの営みをやることに何の意味があるのかについては、何某かの意味があると考えてはおり、また全く答えが思い浮かばないわけではないが、もう少し考えていきたいと思う難しい問いである。一旦ここでは皆さんに投げかけてみたいこととして、筆を止めてみる<sup>16</sup>。ぜひ、ディスカッションスペースでも、一緒に考えていただけると嬉しい。

ただ、それでも、なぜ、そのような楽ではない体験を、参加者に届け、自分たちもやり続けたいと思いつけることができるのかについてだけ、最後に触れておこうと思う。おそらく、(他の)人がいるからなのだと私は思う。伝えたい誰かがいるから、言葉を紡ぐと必死になれる、考えられるという側面が、学問の厳しさに応えていく一つの動機になっているように感じられる。誰かと「まざりあう」からこそ、そして、互いに「変わりあう」からこそ、学問が始まるようにも思われる。

---

<sup>13</sup> UTaTanéの実践は、直接何かの政策決定や集団としての意思決定に関わるわけではない。その意味で、誰かの意見を通せば、誰かの意見を実現できないというジレンマが生じているわけではないが、しかし、ジレンマについて平時から避難訓練のように考える展示を作ることはできているだろう。

<sup>14</sup> 卵として

<sup>15</sup> ビーター・バーガー (1967=2017) 『社会学への招待』筑摩書房。

<sup>16</sup> 本当の理由は書いていると夜が更けそうだからである。朝になったら学園祭だ。いつか気が向いたら書こうと思う。

## 4.おわりに

さて、今年のテーマと私たちの現在地について、書きたいことを書いてきた。まもなく本稿を終わる。

最後に、ごく個人的なことではあるが、私がこの団体の代表となってから、1年と二ヶ月が経とうとしている。強がっても仕方がないから、正直に言おう。苦しくなかったとは言い難い。

それでも、私は、この団体の代表をなんとか続けている。支えになっていたことの一つは、誰かが面白いと思うことを一緒に面白いと思えるメンバーがいることなのだと思う。それぞれが指しているものはもしかしたら少しずつ違っているかもしれないが、一人では辿り着けなかった何かに、まざりあうことでそれぞれに到達できたように思う。そしてそれを今、一緒に面白いと思えていることが、私にとって、とても大切だと感じている。

私は、素敵な仲間たちとともに、まざりあい、少しずつ変わりながら、この場所をつくってきた。参加者の皆さんもそこに一緒に加わってくだされば、とても嬉しい。

## Reference

\*注に示した文献を、書籍のみ末尾にも記し、会場内に置いてあります。興味があるものがございましたら、ぜひお手にとってご覧ください。

- ・伊藤亜紗（2020）『手の倫理』講談社
- ・斎藤純一（2020）『公共性』岩波書店
- ・田中幹人・標葉隆馬・丸山 紀一郎（2012）『災害弱者と情報弱者—3・11 後、何が見過ごされたのか』筑摩書房
- ・ピーター・バーガー（1967=2017）『社会学への招待』筑摩書房
- ・藤垣裕子・廣野喜幸（2008）『科学コミュニケーション論』東京大学出版会